アーティストの卵のたまご

Artist
田中 夏海　TANAKA Natsumi
芸術専門学群
構成専攻 2 年

×

Writer
大谷 友子　OHTANI Tomoko
芸術専門学群
芸術学専攻 2 年

筑波大学芸術専門学群には「アーティストの卵」と呼べるような学生がたくさん所属している。彼らは課題や自主制作を通して、自身の制作のスタイルを確立しようと日々努力し続けている。しかし、彼ら全員が将来に向かって同じタイミングで出発したわけではない。中には高校時代からアートに興味を持ち、制作に励んでいた学生もいる。今回はその一人でもある芸術専門学群 2 年生の田中夏海さんに、高校時代のお話を聞いてきた。

美術を始めた頃

田中さんは芸術専門学群の 2 年生で、2015 年度からは構成専攻クラフト領域に進む予定である。東京都内の中高一貫学校の普通科出身で、高校 1 年生の頃に美術部へ入部した。

—いつごろから美術系の大学に進むことを意識し始めたのですか？

田中　高 1 の冬に先生と面談したころには、美術系を目指していました。私立はお金がかかるし、東京芸術大学にストレートで行ける自信もなかったところ、先生から筑波大学の芸術専門学群を勧められました。ハッキリとした意思があったと言うよりも、ぼんやり「美術系がいいなあ」と思っていました。

—なるほど、田中さんは大学に入学する以前から、自主的に作品を制作していたという話を聞きましたが…

田中　制作という大それたものというか、完全に趣味でしたけど…

—なにをなさっていたのですか？

田中　趣味は切り絵、部活では油絵を描いていました。

—切り絵は以前にも見せていただいたことがありますが、油絵も描かれていたのですね！

田中　一番大きいので 30 号（910 × 727 ㎜）でした（苦笑）

切り絵との出会い

現在は大学で主にガラスを用いた作品を制作しているが、高校時代は主に切り絵作品を制作していたという。「切り絵」は有名な作家や作品がなかなか思い浮かばないマイナーな分野かもしれない。私も田中さんが切り絵を趣味でやっているということを知るまでは、切り絵というものに馴染みがなかったが、実際に田中さんの作品を見た時、感動と驚きを感じた。本当に紙でできているの？と疑ってしまうほど、線の一本一本が繊細で美しい。また、その線が彼女の画風と相性が良く、切り絵の美しさと絵柄の可愛さが共存している。

—現在も続けている切り絵ですが、いつから始められたのですか？

田中　いつからだろう・・・。多分中 3 か高 1 あたりかな。

—何かから影響を受けて始められたのですか？

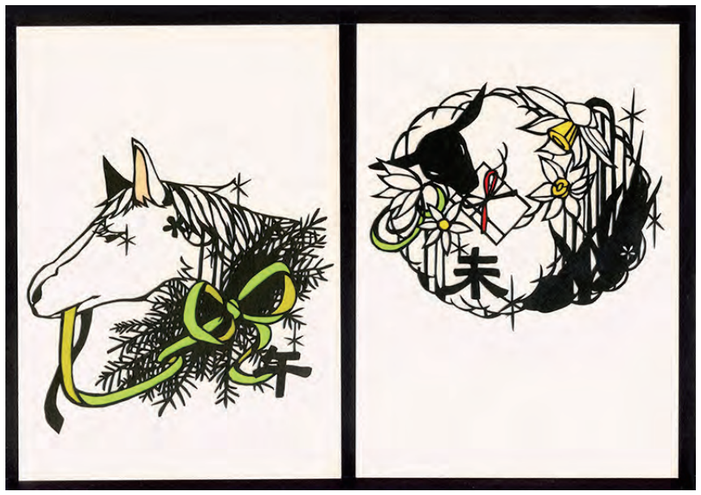
田中　友達の影響で始めました！

—ええ！てっきり切り絵作家さんからの影響だと思っていました。

田中　ためしにやってみたらはまってしまって。好きな作家さん（大橋忍＊さん）もいて、その作家さんを紹介してくれたのもその友達です。初めて切り絵作品を見た時は「こんなこともできるんだ！」と思いました。

—わりと始めたきっかけは平凡な感じですね。

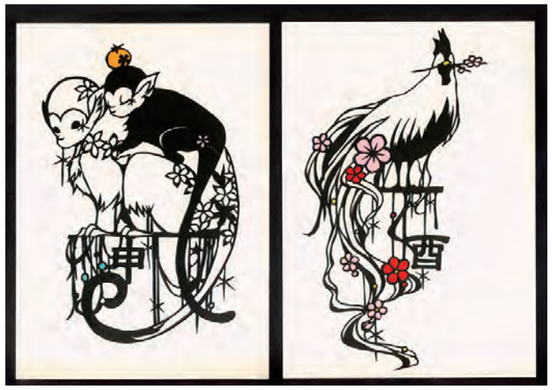
田中　軽いノリです（笑）



上：田中夏海、シリーズ≪干支≫より「午」「未」、2012
左：2014 年度の雙峰祭で販売したアクセサリー。切り絵に樹脂が塗られている。

＊大橋忍
福島県出身の切り絵作家。デザインフェスタへの出展や切り絵の企画展開催など、精力的に活動を続けている。

田中夏海、シリーズ≪ギフトカード≫より「クリスマスカード」、2012



田中夏海、シリーズ≪干支≫より「申」「酉」、2012

シリーズ作品
『ギフトカード』と『干支』

—シリーズ作品もいくつか制作されていますが、きっかけは何ですか？

田中　最初はあまり作品らしいものを作っていなかったのですが、筑波大学の推薦入試を受験するためにポートフォリオを制作する際、美術系の先生に自分が今まで制作した切り絵と油絵を見てもらいました。その時の反応が油絵よりも切り絵の方がよかったので、切り絵でシリーズ≪ギフトカード≫と≪干支≫を作りました。そこでやっと作品っぽいものを作ったと思います。

—なるほど。先生の反応が良かったということは、他の人たちの反応も良かったのでは？

田中　みんなすごいって言ってくれるけど、自分としてはあまり素直に受け取れません。謙遜しちゃいます。多分切り絵はあまりメジャーじゃないから珍しいと思われているのかなと思っています。でも推薦入試の面接の時、面接官の先生からさりげなく褒められたことが嬉しくて今でも覚えています。

—私も初めて田中さんの切り絵作品を見た時、思っていた以上に本格的で驚きました！

田中　いえいえ、そんな、切り絵なんて誰でもできます。ただ、みんなやらず嫌いなだけで私は「みんなもやってみるといいよ！」と思っています。

取材後記

今回の取材は、田中さんと二人で食事をしながら和やかな雰囲気で進められた。入学時から仲が良く、何回か一緒に食事をしたこともあるが、田中さんのアーティストとしてのルーツを聞くことは初めてだった。仲の良い友人のアーティストの卵としてキラッと光る一面を探ることは、私にとって有意義な楽しい時間だった。

私も田中さんと同様、普通科高校を卒業し、筑波大学芸術専門学群に所属している。普通科高校の方なら同じ思いをした人が多いかもしれないが、自分の周囲に美術系の大学を目指す人が少ない…。私の高校時代の同期には運良く、美術系の大学を目指している仲の良い友人が一人いた。その友人と一緒に美術館を訪れることや、文化祭等で展覧会を企画したこともあった。しかし、アーティストを目指す者として切磋琢磨できる仲間がいなかった友人は、課題以上に自由度が高い自主制作において「何をしたらいいのかわからない」と悩んでいる姿を見せることもあった。その後、私は大学 1 年生の頃に初めて田中さんの切り絵作品を見た。高校時代の田中さんの作品には、私の友人が抱えていた迷いや悩みが感じられない洗練された雰囲気がある。まだ卵の段階だけれども、少し憧れに似た気持ちを持った。そして今回この機会を利用し、田中さんに取材を申し込んだ。理由は、切り絵についてもっと聞きたかったからということ以上に、私の高校時代の友人と同じ思いをしている人が他にたくさんいるのではないかと思ったからだ。田中さんへの取材から、美術を志す高校生がアクションを起こすヒントを得てくれたら筆者としてこれ以上の喜びはない。

実際にインタビューしてみると、彼女も決して自分の力だけで道を切り開いてきたわけではなく、周囲の人たちからの影響を受けながら徐々にアーティストとしての道を開拓してきたことがわかる。ただ、インタビュー記事の中にある「みんなやらず嫌いなだけで私は『みんなもやってみるといいよ！』と思っています。」という言葉には慎重すぎず、時には思い切って行動する彼女の性格が表れているようだ。私もそんな彼女を見習いつつも将来に向かって負けまいと前進していきたい。